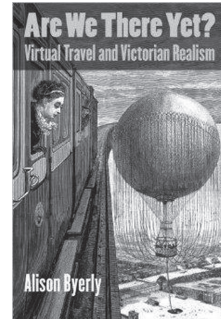


書 評

Alison Byerly, *Are We There Yet?: Virtual Travel and Victorian Realism* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 2013)

中島 俊郎



ダーウィンと同じく、自然選択説を唱えた進化論者、アルフレッド・ラッセル・ウォレス (Alfred Russel Wallace, 1825-1913) は、まさにヴィクトリア時代そのものが重なるような人物である。そのウォレスに晩年発表した興味深い本 (*The Wonderful Century: The Age of New Ideas in Science and Invention* [1898, 1905]) がある。そこで、科学が人間 (生活) に資したもの (successes)、資さなかったもの (failures) の二区分を設けて、科学によるヴィクトリア朝文化の進展、後退を説いている。機械化による労働の軽減から、電気や写真を含み、天文学、地学までを前者の範疇に入れ、骨相学、軍国主義などを後者に分類している。その前者の分類のなかで、最初に評価しているのが「旅行の形態」(‘Modes of Traveling’) であり、「鉄道による旅行が自明になっている時代に生まれた者は、昔の旅がどんなに過酷なものであったか、想像もつくまい」と、ヴィクトリア朝に到来した鉄道の恩恵を声高に説いているのはきわめて印象的である。

このウォレスの旅行観を本書の著者が聞いたら、膝を打って賛同したであろうと想像できる。また、本書を紐解く私たち読者は、反対に、ウォレスが現在に生きていて、インターネットを体験したら、どのような感慨をもらすであろうか、とつい考えてしまう。本書はヴァーチャル・リアリティをテーマにして、ヴィクトリア朝時代と現代を往還させてくれる、喚起力にとんだ研究書であることを先ず指摘しておこう。

第1部 (‘Going Nowhere: Panoramic Travel’) は、「パノラマは19世紀と現代が遭遇する場にほかならない」という刺激的な言葉でもって語りはじめられていく。『ボズの素描集』の読者は、そのタイトルページに描か

れた、気球の上昇を歓喜でもって迎えようとする、クルックシャンクの作品が強く印象に残っているはずである。3時間かけて2、30マイル移動する気球飛行は、人々に「科学はどこまで進歩していくのか分からない」といった詠嘆を吐かせるようになるのだが、それはツーリズム以上に視覚メディアとして衝撃力を孕むようになる。つまりパノラマという見世物で開花するようになるからである。

そしてこの著者は、19世紀的なパノラマの世界が、大友克洋監督がヴィクトリア朝イギリスを再現したSFアニメ映画『スチームボーイ』(2004)のなかでも見事に活用されているのを再確認していく(pp. 29-30)。さらに著者は、ではこの滅びたようにみえるパノラマというメディアがかくも強い蘇生力をもつのは何ゆえか、と問い直し、W. ベンヤミンの『パサージュ論』へとたどり着く。「パサージュと室内空間、博覧会場とパノラマ館はためらいの時代の産物であり、夢の世界の残滓でしかない。目覚めるときに夢の諸要素を活かすのが、弁証法的思考の定石である」(‘Hausmann, or the Barricades,’ *The Arcades Project* [1988, 1999])という一節 (passage)こそ、本書を支える視座となり、ヴァーチャル・リアリティとリアリズムを探求する導きの手となっている。

次に、ディケンズ、ジョージ・エリオット、サッカレー、ハーディの諸作品の小説的修辞がパノラマの視覚、視点によっていかに描写されているかを実証していき、パノラマの観客的視点を移動していく旅行者のそれと重ね合わせ、小説世界のリアリズムをかもし出していると指摘する。

疑似体験という見地からパノラマを考えれば、視覚的イリュージョンに慣れた今日の私たちからすれば時代がかったトリックにすぎない。でも、そこから現出するヴァーチャル・リアリティのもつ迫力は、リュミエール兄弟の映画『列車の到着』のなかで、汽車がスクリーンから突進してくるような画面に驚いた観客が席を立ち逃げ出そうとしたエピソードは今日にあってもいささかも色褪せない。

パノラマと言えば科学的発明を冒険の夢を結びつけ、ジュール・ベルヌの『月世界旅行』のモデルにもなったナダールを誰もが想起するであろう。そのナダールは気球に乗ってパリを鳥瞰し、世界で初めての航空写真を撮影したことでも知られる。写真への考察がいささか少ないのが本書の

惜しまれる点であるかもしれない。

さらに第2部（‘Total Immersion: Navigating the Thames’）は、ヴィクトリア朝の観光ツーリズムでもっとも人気があったテムズ川の船遊びを対象にしている。ヴィクトリア朝に発行されたロンドンのガイドブック（たとえば、*London As It Is To-day: Where to Go and What to See* [1858]）を見れば、テムズ川観光にたずさわる業者は二社あって、市内の主要地に10分間隔で運んでくれる船が出ていること、日曜日には午前8時、平日は午前10時から営業していることなどを合わせて教えてくれる。

では、テムズ川航行が人気を博したのは、世界都市となった猥雑なロンドンからまだ田園をとどめる周辺の地へ運んでくれるノスタルジーの旅であり、またハンプトンコート、ウィンザーなどをめぐることから歴史絵巻の世界に身をおき、悠久の時を体験する旅であったからである。

だが、著者によれば、こうした旅以上に身体の解放感こそ、テムズが誘ってやまないツーリズムの魅力であると言う。そしてヴィクトリア朝の人々が船で川面をすべっていた体験は、まさに今日の私たちがトラヴェル・サイトを「ウェブ・サーフィン」するのと何ら変わるところがないと著者は指摘する。ただ、古風なガイドブックが‘the mobile app “London: River Thames Guide & Audio 1.0”’に代替しただけなのだが、テムズ川ツーリズムの強みは、観光客に旅そのものを体験させてくれるところにある。考えてみれば、それは未知の目的地へ向かうのではなく、既知の場所へ赴くのは、パノラマ体験と重なってくるところで、日常から解き放された感覚に浸るといった、ヴァーチャル・トラヴェルであった。そうしたヴァーチャリティゆえにテムズ川の文学ツーリズムを何ら抵抗なく受け容れることができるのである。あの *Wind in the Willows* の世界へ誘われて、抗える人などいるだろうか。

1837年に刊行された Pierce Egan のテムズ川物語（*The Pilgrims of the Thames in Search of the National*）が大英帝国の国家像を求めて遡源する旅物語ならば、Jerome K. Jerome のテムズ川紀行（*Three Men in a Boat* [1889]）や William Morris のユートピア物語（*News from Nowhere* [1891]）は対極にたつ文学作品である。後者の二作品は「想像上の旅」を体験させる文学テキストであると著者はみなし、詳細な分析対象に加えている（pp.

111-21)。

最後の第3部（‘High-Speed Connection: The Railway Network’）の内容はラスキンのエピグラフ——「鉄道による遠出は旅行ではない。それはある場所に〈送られる〉だけで、旅行者は小包と何ら大差がない」——に要約されているように、これまでにない速度による移行がもたらす新しい文化的側面、混乱 伸展などが検討される。鉄道は類ない速度によって、生活のテンポを速めただけでなく、何ら速度をゆるめようとはしないところから弛緩なき生活までも創出するようになってしまった。遠い僻地と都会を結ぶことで、両者の間に相互交流が発生し、差異が消失し、新たな緊張関係を孕んでいく。まさに鉄道はヴィクトリア朝時代のインターネットというわけである（p. 143）。第3部の知見はシェルヴツシュの『鉄道旅行の歴史』とW. ベンヤミンの『パサージュ論』に負うところが大きい。「…鉄道線路は、レールの技術的必要条件を表わすだけで、レール自体は機械のアンサンブルである鉄道の構成要素なのである。それゆえ鉄道線路による景色の変貌は、実は機械のアンサンブルによる景色の変貌なのである」という有名な一文を枕にして、機械のアンサンブルが旅行者と風景の間に割り込み、旅行者は機械のアンサンブル（‘the machine ensemble’）というフィルター越しに風景を知覚することを検証していく（pp. 143-204）。

ヴィクトリア朝文学の主要な作品群——メアリー・シェリー（*Frankenstein*）、ストーカー（*Dracula*）、ディケンズ（*Mugby Junction*, *Our Mutual Friend*）、メアリー・ブラッドン（*Lady Audley's Secret*）、ジョージ・エリオット（*Felix Holt*, *Daniel Deronda*）、アンソニー・トロロブ（*The Way We Live Now*）、コナン・ドイル（*Sherlock Holmes*）——を用いて、鉄道が与えた感性・美意識の変化、社会にもたらされた距離・空間の広がりや利害の共通性などを検討していく。このような文学作品に現れた鉄道がもたらした相互の影響という問題については、それほど新味があるわけではない。ただ鉄道案内書についての指摘には興味深い一面がある。鉄道ガイドを読む営為は、鉄道旅行がもたらす孤独な体験と通り過ぎていく外的世界とを媒介し、風景がもたらす疎外感や混乱を融和するところに、ガイドブックの存在理由があるというわけである（p 168）。

そして第3部は第1部、第2部に引き続き、ヴァーチャル・トラヴェ

ルの第三局面になるわけだが、ツーリズムがもたらす一連の知覚的变化は、この新しい鉄道による旅において、特筆するほどには生じてはこないと指摘する。つまり鉄道による旅行者は遠い目的地に到着しても、遠隔地に来たとは実感しない。それは静止して見入るパノラマの眩惑、時間から放たれた風景のなかでただよう舟遊びをする旅人の感覚と変わるところがない、からである。つまり、主体がその取り巻く環境から、たえず「すべり落ちていくこと」こそが、これらのツーリズムがもたらすヴァーチャル・リアリティの正体というわけで、換言すれば「不安定、動揺」(destabilization)、もしくは精神医学でいう「失見当」(disorientation)こそがヴァーチャル・トラヴェルの実体というわけだ。

本書を対象とした多くの書評がこれまで新聞、学会誌などに書かれてきたが、現代のデジタル・カルチャーとヴィクトリア朝文化との間に相関関係があるということこそをそれらは共通の論調にしている。たとえば *TLS* に掲載された書評(2013年6月21日号)のタイトルが“Blog in a Boat”となっていることから明らかであろう。鉄道の客車は‘chat rooms’であり、気球飛行者は、“‘SimCity’ version of the metropolis’ に遭遇する”というわけである。

著者が本書のなかで主張しているように、ヴィクトリア朝のヴァーチャル・リアリティ探求と、今日のデジタル・メディアとの間には、たしかに相似性を見出せるであろう。ある意味で *Three Men in a Boat* は今日のブログを、またグーグル・アース (p.117) を先取りしているテキストかもしれない。

ただ、テムズ川をめぐる、休日を雨にたたられた惨めさをとまなう、この痛快な物語を支えるスケッチ風な語りは、この作品以前のスケッチ集 (*On Stage - and Off* [1885]、*The Idle Thoughts of Idle Fellow* [1886] など) にも共通してみられるところである。*Three Men* は「ブログ化された」断片の集積に見えるのだが、統一ある有機体になっている。それは著者 Jerome K. Jerome の資質が物語作家以上に卓越した劇作家ゆえであると考えてもよい(たとえば *Barbara* [1886] 以下の劇作品を参照せよ)。文化研究には着実な文学テキストの分析が必要であることを本書は改めて教えてくれよう。

最後に本書の内容をより広い視野で、より深く理解できるように、関連した研究文献を以下に挙げておきたい。

本書の第1部のテーマである気球遊覧・冒険とパノラマについては、従来もっとも等閑視されていた研究領域と言ってもよい。だが、こうした研究の閉塞状態を破るかのように‘Balloonists in Heaven’という章をもつ Richard Holmes の画期的な研究書 (*The Age of Wonder: How the Romantic Generation Discovered the Beauty and Terror of Science* [2008]) が刊行された。今後、気球にまつわる文学的、視覚的想像力を論ずるうえで、この文献を逸することは許されないであろう。

そして、当然、気球からの眺望は「動くパノラマ」へ移行していく。1988年11月3日から1989年1月15日までの期間、ロンドンのバービカン・アート・ギャラリーで大規模なパノラマ展が開催されたのは、はるか旧聞に属する。でも以来、パノラマ研究に関しては見るべきものがなかったのである。そうした新しい研究の到来が俟たれていたとき、Laurie Garrison を編者とする5巻からなる浩瀚な資料集 (*Panoramas 1787-1900*) が現われたのはまさに早天に慈雨であった。さらに Erikki Huhtasmo の研究書 (*Illusions in Motion: Media Archaeology of the Moving Panorama and Related Spectacles* [2013]) の刊行は、本書の対象であるヴァーチャル・リアリティとヴィクトリアン・リアリズムとの関係をより深く理解させてくれるであろう。

さらに第2部のテムズ川紀行については、簡便だが内容の濃い Mick Sinclair のテムズ川文化史 (*The Thames: A Cultural History* [2007]) は、小説家と同姓同名の著者 (ディケンズの長男) が書いたテムズ川探究の書 (*Dickens's Dictionary of the Thames 1893* [1893, 1972]) とともに目を通しておきたい。

だが、インターネットのなかで、これほど人々の注目を集めるサイトもないほど、テムズ川関係のサイトは充実している。季刊誌『テムズ・ガーディアン』をも発行している、1962年に設立されたテムズ川環境保護団体 (the River Thames Society) が運営するサイト (www.riverthamessociety.org.uk) を代表して紹介しておこう。

第3部の鉄道関係では、どの研究書よりも Jonathan H. Grossman の *Charles Dickens's Networks: Public Transport and the Novel* (2012) に注目した

い。マクルハーンのメディア論に視座をおき、Friedrick Kittler の *Discourse Networks 1800/1900* (1985, trans. 1990) を皮切りに、Bernhard Siegert の *Relays: Literature as an Epoch of the Postal System* (1993, trans. 1999) と Cornelia Vismann の *Files: Law and Media Technology* (2000, trans. 2008) を検討したうえで Richard Menke の *Telegraphic Realism: Victorian Fiction and Other Information Systems* (2008) をも参照した上で書かれた研究書である。以上のように考えれば、ヴォルフガング・シヴェルブッシュの名著『鉄道旅行の歴史——19世紀における空間と時間の工業化』（1979、邦訳、1982）に迫る文献が出現したことになるだろうか。